
F u l l F o r c e

驅風 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F u l l F o r c e

【Nコード】

N 9 2 1 6 S

【作者名】

駆風 友

【あらすじ】

大都市・東京。

犯罪蔓延るこの都市には、警察のほかに犯罪者を滅するものがいた。それは賞金稼ぎ。

裏社会の掟に従い、極秘裏に定められた賞金首を狙い、今日も彼等は夜の都市を跋扈する。

その、賞金稼ぎの中でも腕利きの二人組み・ケイとゼン。

いつものように賞金首を仕留める彼等に、ある依頼が飛び込んでき

それは、イタリアマフィアのボスの救出、敵勢力の排除だった。

二人の賞金稼ぎ

眠らない街・新宿――

今宵も様々な思いの交錯する混沌の世界で人々はそれぞれのドラマを展開する。

昼間は老若男女問わず様々な人々の笑い声が木霊するこの街も、夜になると魔性の顔を露にし、濁流の如く人々の邪念が絡み合う。

地下街となるとその流れはより誇大なものとなる。今、二人の男が歩く道も例外ではない。

現にここに来るまでに三人もの露天商に絡まれ、二人の麻薬の売人に声を掛けられた。

だが、彼等は皆、例外なく石畳の上にねじ伏せられていた。

、男等はまるで嵐の中の台風のように歩む。

やがて男達は一つの店の前で足を止めた。ゲームセンターである。

彼らは知っている。

昼間は若者に娯楽を与えるこの店も、夜になると魔性の本性を現すことを。

男の一人が乱雑にドアを引く。

闇の中でもその色を失わない茶色の瞳に、自分で染めたのか、それとも混血児なのか、白鋼のような銀色の髪を無造作にはねさせた、どこからみても柄の悪い男だ。顔立ちは日系色が濃いものの決して悪いものではなく、むしろ作りは良いのだが、左頬に刻まれた傷跡がますます彼を危険な人間に見せてしまう。

服装はというと、上半身は黒いロングコート一枚で、下は裸、つまり何も着ていなかった。健康そうな体に髑髏をあしらったネックレスが鈍い光を放っている。無論、裸なのは上半身だけで、下半身は青いボロボロの履き慣らしたデニムを穿いている。

そして、彼の肩には何故か釣竿を収納する為のケースが掛けられ

ていた。

半身以上の長さを誇る黒いそれは、明らかに場違いなものだった。そんな男が開こうとする店舗は、既に閉店しているというのに窓のシャッターこそ降りているが入り口の鍵はかかっていない。その為ドアはいとも簡単に閉ざしていた道を彼らの前にさらけ出した。店内に入る。電気は消されて真っ暗だが、彼らはあたかも梟の目でも持っているかのように突き進む。

中はやはり様々なゲーム機が所狭しと置かれており、昼間の喧騒が目に見えそうである。

暫し無音の店内を進む二人の前にドアが立ち塞がる。関係者以外立ち入り禁止と書かれた手前には、背の高く体格のいいサンGLASSをかけた黒人の男性が遮るように立っていた。

彼等は黒人の眼前に立ち、銀髪の男の方が右手を軽く挙げながら、無表情な彼に話しかける。

「よう！ ナイスガイ！ お仕事ご苦労さん！」

扉の番人は男の気さくな挨拶を聞いても顔色一つ変えない。

岩石のように無表情だ。

「なんだよ、暗れえのにカッコつけてGLASSなんかかけてっからわかんねえんだよ！ 俺だよ、俺」

男はじれったそうに自分の顔を指差しながら番人によく顔を見ろ、とジェスチャーする。

「オオ、ケイ！」

男のジェスチャーに従い彼の顔を覗き込んだ黒人の口元が歪んだ。「おめえ、GLASSより眼鏡かけた方がいいんじゃないか？ 只でさえ驚いてえな怖ええ顔がますますおっかなく見えるぜ？ イメチェンしろよ、イメチェン。じゃねえといつまで経っても女が寄りつかねえぞ？」

彼の軽口とも取れる言葉を聞き黒人は苦笑いをした。

「この男が来なかったか？」

黒人の反応を見て馬鹿みたいに笑うケイと呼ばれた男を他所に、

今まで沈黙を保っていたもう一人の眼鏡をかけた男が一枚の写真を取り出し、黒人の目の前に突き出し尋ねる。

野性的なケイとは対照的に、細い体躯ですらったとしたシルエットの黒いスーツを着こなした、落ち着いた雰囲気の知的そうな男である。闇と同化してしまいそうな程の黒い、ウエーブの掛かった肩まである長い髪の毛、これまたケイとは対照的に西洋風の整った顔。一見か弱そうでそうで女性的な外見だが、その眼鏡の下には何か強い意志を秘めたような眼光の鋭い、虎視眈々と獲物を狙う狐のような双眸を持っている。そしてケイ同様、場違いにも背負った漆黒のチェロケースが特徴的だ。

「アア、コノ人ネ。来テマスヨ」

黒人はそう答えた。

「行くぞ、ケイ」

チェロケースを担いだ静の男が動くとき黒人はドアの前から少しずれ、自身が塞いでいた重そうな鉄扉を開いた。

ギィ、という不気味な音が店内に響き渡る。

「そう焦んなよ、ゼン。出入り口はここしかねえんだ、子猫ちゃんもそう簡単には逃げられねえだろ。いや、猫じゃねえ、鼠だな。薄汚ねえ溝鼠だ。まさに袋の鼠ってえヤツよ」

「その通りだが、悠長に長居するつもりはない」

ゼンと呼ばれた男は表情を変えず、抑揚なく淡々と終始軽い調子のケイに応える。

「何だ？おトイレか？ 仕事の時には漏らしてもいいようにオムツ穿いて来いって前にも言っただろ？」

「――」

ゼンは黙っている。無言だがその沈黙が与える迫力はまるで睨みを利かせた阿修羅像のそのようだ。

「冗談だよ、相棒。アメリカンなジョークだ。ほら、怒ってねえで仕事仕事」

表情にこそ表れてはいないが不機嫌そうなゼンを軽く宥め、ケイ

は釣竿入れを揺らしつつ黒人が開けた扉の向こうへと消えた。
彼を眼鏡の底で睥睨しつつ、ゼンも足早に続く。

扉の向こうには地下へと続く階段があった。

くぐもった靴音を響かせ二人は階段を下る。

下りきった二人の前にはまた鉄製のドアがあり、やはり正前にいかつい黒人が立っていた。

「よう！ 常連様のご来店だ、笑顔で迎えろ」

ケイは挨拶代わりの軽口を黒人の門番に投げ掛けるが、言い終わった後いつもそこにいるはずの男と違うことに気付く。

「Only the member can pass and
it do ahead here. Do you have a
membership card？」

彼の知る人間とは違い、日本語が喋れないようだ。

「あ？ ここは日本だ。日本語話せ」

黒人の顔を見据えてケイはそう毒吐く。

「Fool Jap! It is possible to guide it if do not have it. Return to mom！」

「何言ってるやがる。どかねえとその汚ねえ顔が綺麗にカチ割れることになるぜ？」

そう言いながらケイは肩に掛けられた釣竿ケースに手を伸ばす。

刹那、両者の相貌に鋭いものが疾駆する。

いきり立つ彼を見た黒人もケイの動作に呼応するかのように胸ポケットに手をつ込む。

そして、漆黒色の物体を取り出し、ケイの額に向けた。

拳銃だ。

闇に同化してしまいそうな、鉄の銃だ。

「まだ遅くねえ。退け。今すぐ失せろ。じゃねえと二度とアメイジング・グレイスが歌えなくなるぜ？」

すると、ケイは釣竿ケースのファスナーを開放した。

中からは釣竿が出てきて――

と、思われたが、出てきたものは別のものだった。

紺色の柄に、真っ直ぐ伸びた白銀色の刃。

それは、紛れも無く日本刀だった。

ケイは、その得物を竿入れから引き抜くと、黒人の首筋に宛がった。

「It the will only it? Yellow?」

二人は睨み合いなら互いの得物を握る手に力を込める。

まさに一触即発の修羅場である。

「やめろ」

どこか辟易したかのようなゼンの声で互いに睨み合っていた二人が同時に彼の方を向く。

「Mimicry that taking it fool is
his done and it is sorry. If i
t is membership card, it has it.

彼は一旦チェロケースを床に置くと、流暢な英語で言いつつスーツの右ポケットから二枚のカードを取り出し提示した。

黒人がケイの頭から銃を離し、少し強引に赤い紙切れを受け取り確認する。

「I'm sorry. Please pass.

銃を懷に戻しながら黒人は扉の前から身を引く。それを確認してケイも刀を下げる。

「もう一度一から接客態度を学びな、黒豚」

悪態吐きながらケイが扉を開く。

それを見て再びチェロケースを担ぐゼン。

そんな二人が重い鉄扉を開け中へと足を踏み入れる。

すると、目の前には青い蛍光灯の光とタバコの煙に満ちたカジノが広がっていた。

上のゲームセンターの静寂とは裏腹に、そこは人々の歓声や嘆き声で溢れかえっている。ゲーム台では柄の悪そうな男達がゲームに夢中になっていて、中にはまだ高校生くらいの子供も混じっていた。「HEY！ HEY！ HEY！ 遊びの時間は終わりだぜ！ みんな注もおく！」

ケイの大声でゲームをしていた男達やディーラーの動きが止まり、一斉に彼を凝視する。

皆、彼の手に納まった裸の刀を見ると、一斉に沈黙した。

「こん中に広沢卓也ってえ奴いるだろ。どいつだ？ 手え挙げてみ？」

ケイの言葉に右一番奥のテーブルでポーカーをプレイしていた紫色のスーツを着た髪の高い男が微かに反応するのをケイは見逃さなかった。

「見つけたぜ、ゼン」

ゼンはチェロケースを置き、長髪の男の顔と先程上の階の黒人に見せた写真を見比べて黙って頷く。

「くそッ！ サツか！ いや、違う！ それにしちゃあ、柄が悪い！」

長髪の男はゲーム台に置いてあった自分の革製の鞆を左手を使い胸元に大事そうに抱えるとズボンの尻ポケットに手を運んだ。

刹那、銃声が響く。男の動きを見てゼンが瞬時にスーツの下から拳銃を取り出し、銃身を寝かせてトリガーを引いたのだ。

どよめく地下カジノ。

放たれた弾丸は尻ポケットに持っていこうとした男の右手を撃ち貫いていた。

命中したそれは彼の右手から親指と人差し指を奪う。

撃ち落された指が軽い音を立て床に転がる。

痛みに苦悶して絶叫する男の右手から、鮮血が勢いよく噴き出し

た。

「そうだ。違うな。俺達はゴミ処理屋だ。要はお前のような屑塵を処分する懲罰の代行者だ」

怯えきった男はゼンの言葉に戦慄したかのようにだらだらと脂汗を流しながら持っていた鞆を床に落とす。

痛そうに未だ血が噴き出すかつて指があつた部分を押さえる左手は既にトマトケチャップでもぶちまけたかの如くドロドロと真紅に染まっている。

鞆が転がるその足元には早くも血だまりが出来ていた。

「さて。おめえには二つの行き先がある。一つはあの世――」

ケイの口上を聞いたか聞かぬか、男は悲痛な雄たけびを上げながら、彼に向かって突進した。

砌、ケイは接近する男に足蹴を繰り出す。

真っ直ぐに打ち出された蹴撃は的確に男の腹部を捉えていた。

男は声にならない悲鳴を上げ呻吟すると、苦悶の面持ちで崩れ落ちた。

「悪りいけど気が変わっちゃまった」

ケイは激痛に喘ぐ男の目の前まで移動すると、彼の首筋に剣身を添える。

氷のように研ぎ澄まされた刃が、まるで吸い付くように男の素っ首に密着する。

間も無く、それは横に一閃され――

噴水のように盛大な血飛沫を上げつつ男の生首は体軀から切断され、床にごろん、と木から？げた林檎の実よろしく転がり落ちた。

「二つ目は地獄。ほうら、屍山血河の奈落底へ往く片道切符のプレゼントだ」

首の無い男はもう苦悶することも、苦痛に喘ぐこともない。

一部始終を見終えたギャラリーはどよめいていたが、然程驚きもせず、悲鳴を上げることもなく再び中断されたゲームに没頭していた。

「両方とも同じだ、馬鹿者」

戻った喧騒の中、未だ硝煙が上がる銃を下げ、男の骸を見下ろしながらゼンが戒める。

「はン、知ったことかよ。国語の先生様」

刃に被った血飛沫を振り払うとケイは不敵に笑い、血だまりに浸かる男の鞆を拾い上げた。

そしてチャックを下ろし中を覗き込む。

鞆の中には、小さなビニール袋が大量に入っている。

「大漁」

袋の中には白色の粉が詰まっていた。

「予定は大幅に乱れたが任務完了だ。帰るぞ」

そう言うゼンは拳銃をスーツの内ポケットに仕舞い、チェロケースを担ぐとゆったりとした足取りで入ってきた扉から退室する。

扉の奥からは小さく階段を登る足音が聞こえた。

「あばよ、運なし。あの世では精々加護って貰うんだな」

横たわる男の亡骸に向かって挨拶するとケイも刀を竿入れに戻し、ファスナーを走らせるとカジノルームを後にする。

部屋を出た瞬間、ドア越しに中の様子を見ていた黒人と目が合う。

「Manage to do foul breath ahead of that though the part time job is also. it smells like the rot of the fish.」

言い終えるとケイはズボンのポケットからガムを一枚取り出し黒人の口に入れ込んだ。

「またのお越しを。クソ坊主」

入れられたミント味のガムをクチャクチャと噛みながら黒人は、階段を登るケイを右手の中指を立てながら見送った。

「なんだよ、アイツ——日本語喋れるんじゃないかよ」

二人の賞金稼ぎ（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

ミッション

仕事帰りの早朝。ケイとゼンは目黒の喫茶店にいた。

二人は壁際の四人掛けテーブルを陣取っている。

壁に立て掛けられたケイの竿入れとゼンのチェロケースが窓から差し込む曙光を浴びて鈍く光沢を放っていた。

「ふぉぁぁぁ！」

テーブルに置かれたコーヒーに砂糖とミルクを入れてスプーンでかき混ぜながら、ケイはだらしなく大あくびをする。

「まったくーいつも思うがよ、仕事帰りの朝って何でこうも眠いんだろうな」

先程から眼前で黙々とお茶を啜っているゼンに問いかける。

ゼンは答えない。

「当たり前だよ、やっぱ寝てないからだと思うワケよ。睡眠って大事だよな。アレがあるから人間気持ち云々をリセット出来るんだ。違うか？」

「――」

「ああー、遅せえな、ルイの奴。約束の時間過ぎてんじゃねえかよ。なあ？」

やはりゼンは無言でお茶を啜っている。まだ熱いらしく、湯飲みからは湯気が立ち上り、彼の眼鏡を白く曇らせていた。

「無視すんなよ！ おめえ、さっきからすまし顔で茶なんて啜りやがって！ 茶道部部員かよ！」

両手でバン、とテーブルを叩きながらケイは叫んだ。他の席で朝食を取っていた客が驚きの眼差しを彼等の座るテーブルに投げかける。

「ケイ」

ゼンはケイの怒号にも動じず湯飲みをテーブルに置くと、眼鏡を外し紙ナプキンで曇ったレンズを拭きながらやつのこと口を開い

た。

「何だ？」

未だ怒りが収まっていないらしく、苛々とした口調でその言葉に
応じる。

「煩い、よ」

眼鏡を掛け直しながらゼンは実に短い言葉を発する。だがその言
葉は閻魔が放つ一言にも匹敵する程の迫力が込められていた。

「はい、すみません」

小さい声で謝罪するケイの顔には薄ら恐怖の念が窺えた。

そんな彼を一瞥しつつ眼鏡を掛けたゼンは何やら思う。

思う、というよりもたった今頭に何かが閃いたようだ。

そんなイメージを抱え、ゼンはレンズ下で双眸を細めつつ再び湯
飲みを手にとった。

店に静寂が戻る。

「さっきの話だけだよ」

唐突にケイが口を開く。

「ちよいとここで寝てもいいかね？ 眠くてかなわんわ」

と、大口を開けて欠伸をしながら呟くように言った。

「俺は構わんが、あの甘ったるそうなおやつがルイの腹の中に納ま
っても責任は取らんぞ」

湯飲みの中を眺めつつゼンが返す。

「おやつじゃねえ。スイーツだよスイーツ。イチゴサンデーは立派
なスイーツです」

「悪いが俺には同じにしか見えん。何を以ってそう分別するか教え
てはくれないか？」

「ああ？ それはだな、えっと、ああ、あれだ、その――何つうか」
しどろもどろに困惑するケイを尻目に今一度茶を啜るゼンの表情
には嘲けの情が見て取れた。

「なーことはどうでもいいんだよ！ 兎に角イチゴサンデーはスイ
ーツだ！ おやつなんて餓鬼の食うようなもんじゃあ断じてねえ！

！
」

「そうか。ではこの間この場所でそのイチゴサンデーとやらをランドセルを背負った小学生が食べていたのは俺の見間違いだっただか」

「スイーツは老若男女みんなのものです」

そう棒読み口調で語ったケイは困ったように頬を掻いた。

「言っていることがさつきと違うのも俺の思い違い、か？」

「なあ、今日のお前、案外饒舌だな。てめえも寝てねえでハイになつてんのか？」

「てめえも、と言ったところをみるとお前は自分が有頂天になっていることは自覚しているということだな」

挑発とも取れるゼンの態度にケイは怒号で返す。

「うるせえよ茶道部部員が！ 赚してんじゃねえぞ！」

「まるで餓鬼だな。やはりイチゴサンデーは餓鬼の食べ物のようなだ」

「てめえ、世界各所のイチゴサンデーファンに謝りやがれ！ 裸で土下座しろ！ 裸で！」

「煩い、よ」

再びゼンの顔に鋭いものが奔る。

「うっ、だがよお前。何でそんなご機嫌なんだ？」

「ご機嫌？ 何を勘違いしている。お前のお陰でそれに不の前置詞が付いているのにまだ気づかないか？」

「隠し事はなしだぜ？ ゼンちゃん。また“見えた”のか？」

ケイが声のトーンを下げると、ゼンは首肯した。

「さつき、な。来るぞ。久々に大物が来るぞ」

「マジか？ 大物？ どんくらいだ？」

「さあ、な。近いうちにわかるだろう」

そんな会話の中、燕尾服の店員がイチゴサンデーを運んできた。

「おう、こっちだこっち！ ここに置いてくれや」

畏まりました、と笑顔で言う店員はケイの前にイチゴサンデーを置いて去っていった。

「さあて！ 疲れてる時は甘いものだ！ 糖分摂ってIQアップだ

！
」

「糖分でIQは上がらんよ」

嘆息交じりに呟くゼン。

「え！？ マジかよ！ つーか、IQって何？ 何語？ 何の略？」

「――」

再び店内が静まり返った。

「ケイちゃん！ ゼンさん！ 遅れてごめん！」

暫し続いた静寂を破ったのは新たに来店した女だった。

二十代前半くらいの、小柄で茶色い髪を短く切った、どこかボーイッシュな女性だ。

彼女は遠慮がちな声量でそう叫ぶとケイ達の座るテーブルへと早足で歩み寄る。

「やっと来たか。おいしい、こっちだよ、ルイ」

椅子にもたれ掛かりつつイチゴサンデーを食べていたケイがだらしない声で遠方のルイと呼ばれた女性に手招きをした。

「まずは食え。喋るのはその後だ、馬鹿者。それと、今飛んだものは拭いておけ」

言い捨てつつ眼鏡の底でケイを睥睨するとゼンも女性の方を見た。

「ごめーん！ ちょっと仕度に手間取って」

ルイがいそいそとゼンの隣に腰掛ける。

「あら、美味しそうなもの食べてるじゃないの。新メニュー？」

「ああ。巷で流行のスイーツだ」

「へえ、ケイちゃんも流行とかに興味あったんだ？」

「さあ、な。言っておくがやらねえぞ？ 一口足りとも分けてやんねえ」

「ええー、つれないわね。いいもん、あたしも頼むから。ゼンさん、メニューどこ？」

「ルイ、本題を忘れないでくれ――」

二人のやり取りの最中、そう嘆いたゼンが異変に気づく。

見渡すと、いつもは一人分空いているはずの四人席が満席だった。

「おい。何だよ、このガキは」

ケイもその非日常な風景に気付き、ゼンの隣に座る子供を見ながら問いかける。

それは黒いワンピースを着た少女だった。年は十歳前後であろうか、宝石のような青い瞳に真っ直ぐで綺麗なブロンドの髪の毛から、この国の人間ではないと推測出来る。

「後で説明するわ。その前に――店員さん！ オーダーですー！」

「待て。だから本題を忘れるなど言っているだろう」

「そうね。そうだったわね。ごめんごめん」

「頼むぞ、ルイ――お前までこの馬鹿者に感化されないでくれ」
言いつつゼンは足元から革製の鞆を取り出す。そう、昨晚彼等が押収した品である。

ルイは鞆を受け取るとチャックを下ろし中身を確認した。

「オーケー。二人ともよくやったわ」

「なあに、ちよろいモンだよ。なあ？」

得意満面な面持ちでイチゴサンデーを掬うケイと無言のゼン。

「広沢卓也は？」

「今頃閻魔様とよろしくやってんだろうよ」

口内でイチゴの塊を咀嚼しつつケイが抑揚なく言う。

「――そう」

「相手が身構えたのでな、応戦せざるを得なかった。俺は行動不能にするだけに止めようとしたのだが、この馬鹿者が引導を渡してしまった――すまない」

「何だよ、俺が悪いってか？ 止めなかったおめえも悪いんじゃないのか？」

「止めても聞かんだろう、お前は。俺は無駄な行動はしない」
「何だと、頭に來たぜ。おめえ、さっきから仏頂面して座ってやがってこの――」

語彙を荒げつつ身を乗り出そうとしたケイだったが、イチゴを咽

てしまいその場で咳き込んだ。

「やめなさい！ 朝っぱらからみつともない。他のお客に迷惑よ」
ルイの制止を聞き流しつつ、ケイは先程ミルクを入れたコーヒーを流し込んだ。ゼンはというと終始何一つ動じず、右手でずれた眼鏡の位置を直している。

もう一人、少女はというと。

「――」

関わりたくない、といった感じの表情で目の前に置かれた水の入ったグラスに視線を落としていた。

「まあ、降りる報酬は大幅に下落するけど――仕方がないわね」

「――」

「チッ」

黙って受け止めるゼンと舌打ちをして悪態つくケイ。

「でも、一応品物は押収出来たワケだし、ミッションは成功よ」
チャックを閉め、麻薬の詰まった鞆を自分の足元に下ろす。

「んで、こいつ誰？」

少女を指差しながら不機嫌そうな声でケイが尋ねる。

「この子は――そう。次の貴方達のクライアントよ」

「はあ？」

ケイは飲んでいたコーヒーを咽ながら耳を疑う。

「どういうことだ、ルイ？」

ゼンの方はやはり冷静である。

「今から説明するわ。この子ね、イタリアマフィアの娘さんなの」

「イタリアマフィアだあ？」

「ほう」

「トニオ・ワーニエっていう人なんだけど。で、そのお父さんがマフィア間の闘争に巻き込まれてね――」

「死んだのか？」

ルイの結論を待たずにケイは聞き返す。

「いえ。行方不明になったの」

言いながらルイはハンドバックから一枚の写真を取り出しゼンに手渡した。

黙って手渡された写真を見つめるゼン。それには小太りで白髪をオールバックに整えた背の低そうな中年の男が映っている。

「あ、そ。そいつあお気の毒。ていうかここ日本。ジャパン。他国の問題を持ち込むな」

ケイが斜め前に座る少女に向かって毒吐く。

「――」

少女はケイのいない方に視線を泳がせ黙っている。

「何だよ、こいつもだんまりか。ゼン、こいつ実はおめえの親戚なんじゃねえか？　よう、俺はおめえみてえな陰気臭せえ奴は大っ嫌いなんだ。ましてやガキときた。二重苦だよ。ウザってえ」

「相手は子供だ、言葉を選べ。馬鹿者」

ゼンの言葉を聞き再び少女に目をやるケイ。少女は俯いていた。

「な、何だよ？　俺、何か悪いこと言ったか？」

「ケイちゃん？　貴方、もう少し人の気持ちを考えなさい。大人でしよう？」

ルイは席を立ち、少女の隣まで移動すると優しく頭を撫でる。

「だからガキは嫌いなんだ」

少女を横目で睨みながら再び毒吐く。そして今一度コーヒーカップを口に運び、一気に飲み干し派手な音を発てテーブルに置いてみせる。

「それにしても、この馬鹿者の言うことも一理ある。何故日本の俺達に依頼が来る？」

「この子のお父さんが失踪する時に彼女宛に一通の手紙を残したの」
ルイは自分の席に戻りそう言った。

「手紙？」

「ええ。それには自分はこれから日本へ行くと書いてあったそうよ」
「日本に？」

「どうやら敵対勢力に追われてこの国に逃げ込んだらしいわ」

「成程な。その手紙の日付はいつだ？」

「丁度一週間前よ」

「その後の連絡は？」

ゼンの言葉に少女は首を横に振る。

「連絡の約束は？」

「日本に着いたら連絡する、と書いてあったらしいけど」

少女に代わってルイが答えた。

「なら生きてる可能性は低い、か。残念だったな。それに、俺達が行方不明者を探す探偵じゃねえ、行方不明者を作る殺し屋だ。勘違いしている暇があるなら自分で探しな」

今まで聞きに回っていたケイが口を開く。

少女は俯いたままである。

「だが零ではない。何かしらの事情があって連絡が取れないだけかも知れん」

その言葉でようやく少女が顔を上げ、ゼンを見つめる。

「彼を追っている勢力の規模は？」

「カンツォーネファミリーと呼ばれる大規模かつ有名なマフィアらしいわ。フォリフェ・カンツォーネという男がドンよ」

「その缶詰めファミリーの追っ手もこの国に来ているってことか？」

「カンツォーネだ、馬鹿者」

「そう。昨日ケンさんが警察のパソコンをハッキングした結果、ある男が入国している事がわかったわ。国際指名手配されている腕利きの暗殺者よ」

「誰だ？」

「貴方にならワスプと言えば判るでしょう」

「XNか」

「ワスプ？ ザン？ 誰だよ？」

二人の会話についていけないと言わんばかりにケイは二人に尋ねる。

「スズメバチの異名を持つ、英国生まれの暗殺者よ。元は傭兵で様

々な戦場を駆け抜けてきた歴戦の猛者ね」

「成程。奴は俺達の世界でも特級殺人犯罪者として標的の一人になっている。よってその駆除という名目だけでも本来の仕事として成り立つ訳か」

「ええ。ジンさん直々のミッションよ」

「ジンの野郎、こんな面倒なガキを差し向けやがって」

「報酬は？」

ゼンの言葉にルイは小首を捻る。

「うーん、まだ分からないわ。何せクライアントが未成年だし保護者が行方不明な訳だから」

「なら却下だ。他行ってくれ」

あっち行けのジェスチャーをしながらケイが言う。

「ちよつと、ケイちゃん――」

「こいつが可哀想ってか？ ああ、俺達は心理で動いてるんじゃない。道理で動いてんだ。報酬があって初めてクライアントの依頼をこなすのが俺達の世界の道理なんだ。こっちは命賭けているんだ、Reward noneは割に合わねえんだよ」

すると少女がポケットの中から何かを取り出す。

それは小さなキャンディだった。

「おねがい――パパをたすけて――！」

ゼンの顔を縫るように見ながら彼の目の前にキャンディを置きつつ、少女は初めて口を開いた。

「ああ？ これが報酬ってか？ 馬鹿にするんじゃない！ そんなモンで命賭けられるか！ これは餓鬼のおままごとじゃねえんだよ！」

怒鳴ったケイは少女が置いたキャンディを乱雑に掴み取り、開封し口に放り込んだ。

「あ――！」

唾然とする少女。

だが怒りもしなければ泣きもしなかった。黙ってケイの顔を見据え

ている。

「強いな」

横目で少女を見ながらゼンがぼそり、と呟いた。

「あん？」

キャンディを噛み砕きながらケイは疑問符を浮かべる。

「いいだろう」

「え？」

「引き受けよう、ということだ」

ゼンの台詞に、再びケイが咽た。

「なッ？ おめえ、正気か！」

「ああ」

「ふざっけんな！ 俺はぜってえやらねえからな！ やるんだったらおめえ一人でやれよな！」

「そうはいかない。お前は先に報酬を受け取ったのだからな」

「はあ？」

「たった今、噛み砕いているソレだ」

「――！」

そのやり取りをルイはやった、という面持ちで見ている。

「と、いう訳だルイ。ジンには承諾という方向で伝えてくれ」

ゼンは写真を今し方取り出した手帳に挿み、席を立つ。

そして、壁に立て掛けてあった自身の荷物を担ぎ上げる。

「ちょ！ ちょっと待てよ、ゼン！ 何勝手に決めてやがる？」

「今から情報を集めてみる。ケイ、お前はこの娘を連れて家に帰って休め。何か判ったら連絡する」

そう言い残すとゼンは自身の分の会計を済ませて店から出ていった。

「野郎――まったくふざけやがってあの野郎！」

怒り心頭なケイが思いきりテーブルを殴る。イチゴサンデーの容器が微動した。

「ゼンさんなら絶対引き受けるってジンさんが言っていたけど、本

当だったわ」

「あん？ どーいうこった？」

「ゼンさんはね、仁侠の世界の生まれなの。それで、子供の頃に家族を派閥同士の闘争で失っているのよ」

「――！」

ケイより前に少女が驚きの顔を浮かべた。

「だから放って置けなかったのでしょうね。今この子が抱えている悲しみや焦燥感を、彼はよく知っているのだから。さあて、ケイちゃんも納得したみたいだし、あたしもイチゴサンデー頼むわよお！」

「

うんざり顔のケイは、意気揚々なルイが店員を呼ぶ声を前座席に座る少女を睨みつつ聞き流していた。

「これが、あいつの“見た”大物ってか？ 冗談きついぜ――」

ミッション(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

調査

「よお！ゼン！今日は早いな！」

ここは昼を大分過ぎた原宿の駅前。ゼンは少女の父親の消息の手がかりと彼を狙う暗殺者・XNの動向の調査の為にある男の元を訪れていた。

「聞きたいことがある」

そう言うとゼンはチェロケースを担いだまま、スーツの内ポケットから手帳を取り出し、中に挟んであるルイから受け取った少女の父親の写真を赤いポロシャツに青いズボンの頬のこけた痩せぎすの露天商の男に見せる。

「こいつを知らないか？」

「ん？こいつ、ワーニエファミリーのドンだろ？」

「知っているのか？」

「ああ。イタリアじゃ有名なギャングだよ」

ゼンは眼鏡を写真を持つ手で位置修正する。

「今、この国にいるらしい」

「みたいだな」

「何か知っているのか？」

「おう。五日前に渋谷のライブハウスで見かけたってえ奴がいるってさ」

「本当か？」

「ああ。キチさんの情報だから間違いない」

「その後の足取りは判るか？」

「んー、その二日後——つまり三日前にも渋谷で見かけたって奴がいるらしい」

「と、いうことは少なくとも三日前までは生きていたということか。しかも渋谷を行動拠点もしくは隠れ家になっている可能性が高いな」

「また厄介事かい？」

男は怪訝そうにゼンに問う。

「そうだ。こいつを今ワСПが狙っているらしい」
ゼンの言葉を聞いて男は目を見開く。

「ワСПって——まさかXNか？」

「ああ」

男は腕を組む。

「じゃあもう死んでいるかもなあ。奴に狙われて延命している奴なんぞ、今だかつて誰一人いないからねえ」

「——」

「気を悪くしないでくれよ？ あくまで俺の推測さね。だが、そう考えるのが一番妥当だよ。何せ相手はあのワСПだろ？」

「どんな動物にだって完璧という言葉は無い」

「そうだが——」

「取り敢えず現地に向いてみるか」

そう言うときゼンは写真を手帳へと戻し、今度は手帳が入っていた方とは反対の内ポケットから財布を取り出し男に福沢諭吉を一枚手渡す。

「毎度。まさか、奴と殺り合うつもりかい？」

「最悪そうなるだろう」

「それが今度の仕事かい？」

「そうだ」

「止めとけよ、いくら“妖狐”でも毒蜂には敵わないよ」

「だが、契約を承諾した手前、投げ出す訳にはいかない」

「珍しいね、アンタがそこまで執着するなんて」

ゼンの背中が遠ざかる。

「死ぬなよ、ゼン。アンタに死なれちゃあ、商売騰ったりだからね」
ゼンは半蔵門線の駅階段を下っていった。

「やれやれ——妖狐と毒蜂、どちらに軍配があがるかねえ」

「やあ、ケイ。ミッション成功おめでとう」

ケイが代々木片隅の古書屋に入ると若い、童顔で小柄な短い黒髪の男が出迎えた。

この店の店長である。

「ん」

ケイは男の座るカウンターの近くに來ると、壁に竿入れを立て掛け、置いてあった小さな脚立に腰掛ける。

「その子は――君の娘さん？」

店長はケイの背後に立っている少女を見ながらそう言った。

少女は目を丸くして辺りを見渡していたかと思えば、本棚から無造作に本を抜き出し読み始めていた。

どうやら、異国の本屋が珍しくて仕方がないようだ。

「あ？違うよ。ジンの奴に子守押しつけられちまっただけさ。っておめえが知らねえはずねえだろ？」

「ああ、知っているよ。君達の新しいクライアントでワーニェファミリーの次期統率者だろう」

「そのことでちよいと聞きたいことがあるんだよ」

「へえ、君から僕に頼ってくるなんて珍しいね。今日で世界は滅亡かな。ずいぶん遅れたノストラダムスだ」

「いちいちうるせえぞ？ ケン。舌を抜かれてえか？」

はは、とケンと呼ばれた男は笑う。

「で、何が知りたいんだい？」

「XNって奴のことだよ。これもめえなら色々知ってんだろうよ」彼の言葉にケンの顔が曇った。

「ワスプのことか。残念。今、僕も調べているところだよ」

ケンはカウンターのの上に置いてあるノート型パソコンを操作する。「んで、何か分かったかよ？」

パソコンの画面を睨みながらんー、と顎に右手を添えるケン。

「他のギルドの情報だと、昨日の夕方に渋谷の路地裏で見かけたら

しい」

「他のギルドも動いてんのか？」

面倒くせえことになってるな、と呟きながらケイは足を組んだ。

「ああ。何せ国際指名手配される程の大物が網に掛かったんだ、みんな見逃しはしないよ。まあ、大方返り討ちに会うだろうけどね」

「そいつあ凄えな。何だあ？敵さんは鬼か何かか？」

「ドッペルゲンガーって知ってる？」

「ああ——確か、都市なんたらってえのでもう一人の自分がいるってヤツだったか？」

「掻い摘むとそんな感じだね」

「それが、XNと何か関係があんのか？」

「大有りさ。彼がまさにそれで、つまり同じ人間が二人いるってこと」

「どういうこった？」

首を捻りつつケイが疑問符を浮かべる。

「ワスプのもう一つの通り名がそのドッペルゲンガーなんだ」

「てえことは、奴さんは魔術師か手品師か？はは、冗談きついぜ」

冗談交じりにそんなことを言うケイの顔を見つめながら、ケンも首を捻った。

「どうだろう」

「はあ？ おめえにしちゃ、随分曖昧な返事じゃねえか」

「うん——それが本当に判らなくてね。そのドッペルゲンガーの正体が」

「あん？ どおいうこった？」

「彼に殺される人間は皆、死に際にもう一人の彼を目撃するそうだ」

「もう一人って——XNか？」

「ああ。とある故人が自身の仲間に残したメッセージでね。本当かどうかは判らないんだけど」

「分身か？ 忍者みてえにドロン、てさ」

「いや——それはないんじゃないかな？何か物理学的なトリックを

殺しに流用しているかなんかじゃない？」

「よくわかんねえが、兎に角ブツ殺せばいいんだろ？ 相手が本物の幽鬼じゃあねえ限り、幾らでも勝算はあるだろうよ」

足を組み替えながらケイが言う。

「おいおい、相手は数多の戦場を駆けた歴戦の猛者だ。そんな軽い乗りじゃ、彼に殺された連中の二の舞だよ。それに、今回はその子の保護を優先しないと」

「保護ったって、遅かれ早かれこっちの動きに気づいたら間違いない仕掛けてくるだろ」

「まあ、十中八九そうだろうね。もしかしたら既に勘付いているかも。あ、そう言えば今日はゼンがいないね？」

「はあ？ 俺がいつもどこでもあの賺し野郎と一緒にいるかってえの」

ぶつきらぼうに言い捨てたケイの態度にケンはあるは、と短く笑う。

「君達は仲がいいんだか悪いんだかほんと、分からないよ」

「あいつよ、いきなりいきり立ってどっかに消えちまいやがってさ。まさか、てめえ一人で報酬を独占する気かねえ」

「いや、彼はそんなケチな人間じゃないはずだよ。もしかしたら何か思い当たる節があるのかも」

「そーいやあいつ、また“見えた”って言ってたっけな」

「見えたって、また“未来”が？」

「そうじゃねえか？ まったく、あいつの目にも困ったもんだぜ。」

野郎、どうやら今回の獲物の事、見えていたらしいぜ」

「その目のお陰で君は幾度となく窮地を救われたんじゃないなかったっけ？」

「ああ？ んな遠い昔のことなんぞ忘れちゃったよう」

「まあ、だったら今回の一連の件の結末も見えているのかも、ね」

そんなケンの台詞を鼻で笑い飛ばすとケイは立ち上がり、壁にもたれ掛かっている竿入れを掴み取り肩に掛けた。

「彼と交戦するようなことになっても、油断したら駄目だよ。慢心と過信は死を招く。いつでも、どこでもね」

「分ってるさ。んじゃ、取り敢えず今度はコウのところ行ってくらあ」
ケイはカウンターに背を向けた。

「もし、ドッペルゲンガーについて何か判ったら連絡するよ」
「おう」

出口の前まで来てケイは忘れ物に気付く。

「金魚みてえに大人しいから忘れてたぜ。ほら、ガキ。置いてくぞ」
そう言い残すとケイは店を出た。

少女は急いでケイの後を追う——と思いきや、カウンターのケンの元へと向かった。

「ん？」

少女は黙って今まで読んでいた本を差し出す。

「ああ、買ってくれるんだね？」

少女は小さくこくん、と頷く。

「えっと——」

ケンは少女から本を受け取る。

「君、難しい本が好きなんだね」

少女が読んでいたのは小難しい天文学の本だった。

時間はすでに午後を悠に過ぎている。

あれからゼンは単身渋谷へと出向いていた。

それは先程の露天商の男の言葉を辿ったのもあったが、もう一つ大きな意味を持っていた。

JRの駅から出てきたゼンはそのまま数分表通りを歩いている。
進む先に彼の目的地があるのだ。

喧騒絶えない歩道を進むと暫くして道端にボーリング場が見えてきた。

そこが、そこそがゼンの目的地である。

建物の前に辿り着いたゼンはそのまま扉を開け放ちカウンターへと向かった。

「おやおや、これはこれはゼンさんじゃあないですかい」

カウンター付近まで行くと色眼鏡を掛けた中性的な顔立ちを持つ金髪の男が声を掛けてきた。

「今日は、今日こそはプレイしていくのですか？ それともそのチェロの生演奏を聞かせてくれますか？」

その言葉にゼンは首を振る。

「何だ、今日も冷やかしかい？」

「いや、きちんと用件はある。金も払う」

「はは、流石はゼンさん。“あの小僧”とは違ってちゃんと礼節を弁えている」

へらへら、と笑む男との距離を詰めるゼンはカウンター前へ。

「小僧は言葉が違うな。お前等は――」

「おっと、ゼンさんよ。奴の話はこの際無いことにしませんかい？ 胸糞悪くて適わないさね」

彼の言葉に首肯すると、ゼンは手帳を取り出し、中に挟んでいるトニオの写真を引っ張り出した。

「ああ、あんたもそれ追ってんですかい？」

「ということはお前等六亀も？」

「いんや、どうだろうねえ」

「言いたくなければ言わんでもいい」

「いやいや、くれるものさえくれりゃあ全部洗いざらい話すさ。それが俺達六亀のやり方だよ」

そう言い終った男にゼンは一万円札を三枚手渡した。

それを嬉しそうに宙に掲げ、口元へと引き寄せ口付けすると男は語りだした。

「この先のクラブハウス。確かパラダイスだったかな？　そこに行きや会えるよ」

彼の告白に小さく礼を言ったゼンは違う問いを持ちかける。

「そこまで知っていて何故お前、いや、お前等は動かない？」

すると、男は色眼鏡を指でずらしながらへらへらと言った。

「あんただって俺等の実力くらい知ってるだろうに。同じ仲間内では下の下の俺等が、そんなドッペルなたらとか訳分からん能力持ちの鬼札のある手札に勝負仕掛けられるかいつていうんだ」

それを聞くとゼンは踵を返そうと足を動かした。

が、男の言葉が続く。

「なあ、ゼンさん。あんたまた“見えたり”したのかい？」

黙って歩を踏み出そうとするゼンの態度にまたしてもへらへらと笑みを零す男。

「だとしたらここにや来ないか？　ていうか、見えたとしたらどこまで見えたんだい？」

「奴と対峙しているところまで、だ」

「景色は？　背景とかよう」

「薄暗くてよく分からん」

二言共、短く言い捨てたゼンに男はうんうんと唸る。

「確か、近い未来を断片的にしか見れないんだっけ？　あんたの左目」肯定も否定もせず、ゼンは振り返り男の顔を見た。

「俺もあんたみたいに一度失明しかければ、そんな便利な能力を得られるのかねえ？」

「さあ、な」

首を元の位置へと戻し、進歩するゼン。

「ちっ、あいつはいい相棒を持ったよ。“数時先の未来が見える男”。実に羨ましい。妬むよ、全く」

そんな男の言葉は、店を出たゼンの耳には届かなかった。

調査（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

毒蜂

時は夕刻。世界を照らしていた太陽は地平線へと沈み、断末魔の雄叫びの如く橙色の光を放っていた。

黄昏色に染め上げられた世界を人々は行き交う。ある人は疲れた顔をしながら。またある人は充実したこの一日を讃えるような顔をしながら。

そんな人々が行き交う交差点をゼンは突き進む。

場所は渋谷のセンター街。この近くにトニオが目撃されたというライブハウスがある。そこへ向かっているのだ。

やがて路地裏へとやってきたゼン。目的の場所は目の前にあった。パラダイスという名のその店はチカチカと、派手な光を放つネオンサインとは対照的に、地味で質素な外見だった。

彼は入り口で足を止めたが、中には入らなかった。再び歩き出し、店の裏へと回ると非常階段を登り、建物の屋上へと出る。

そして。

「お前がワस्पか」

屋上にたどり着いたゼンが振り向きもせず、自分の背中に向かって言葉を投げ掛けた。

「ほう。我が追跡に勘付いていたか。成程、故にこのような場所へと誘き出した訳か」

彼の背後から萎びた低い声が返ってくるが辺りに姿はない。

「余計な血は流したくないものでな」

「クク——偽善者め。本当は血に飢えているのだろうか？ “妖の狐

”よ」

「その名を知っているとは——どこまで調べた？」

「君等の経歴は全てだよ。ゼン——いや、“北凰寺善幸君”」

「——！」

ゼンは一瞬で体の向きを変え、同時に懷から銃を取り出し構えた

が彼の目の前には落暉が彩る黄昏色の虚空が広がるだけだ。

「そう急くな、妖狐よ。私は君と一戦交えに来たのではない」

夕陽を浴びてゼンの拳銃が鈍く光る。

「ならば、何が目的だ」

虚空に向かって問いかける。

「何、簡単なことだよ。今、君等の保護している娘を渡しては貰えないかね？」

「――！」

「いや、私への依頼者からの命はワーニエ一族の抹消でね、彼女とて例外ではないのだよ。まったく、泣かせる話ではないか。命を狙われた父親を助ける為に危険を犯し単身で異国へと渡るとは。最も、もう既にトニオ氏は存命してはいないがね」

「殺ったのか？」

「ああ。君等が動く前にね。時既に遅しだよ、ゼン君。これで君等のミッションは失敗ということになるね」

ゼンは何も言わない。抑揚の無い面持ちのまま一度舌打ちをしただけだ。

「つまり、あとはあの娘を始末すれば私のミッションはコンプリートだ。いやいや、本当に勇ましい娘よ。でも、相手が悪すぎたかな。こういう事は君等の国の言葉で飛んで火にいる夏の虫と言うらしいね。自ら死地――蜂の巣に飛び込むとは。一言で言ってしまうえば無謀に他ならぬのだが。ククー――」

ゼンは只黙って愉快そうにクツクツ、という笑い声を漏らす敵影を索敵する。

「だがね、私はその決意と勇気を高く評価しているつもりだ。だからこうやって慈悲をかけているのだよ。本来なら口封じの為、関りを持った君等も始末せねばならないところなのだが、その勇ましき行為に敬意を表して特別に――そう、特別にだ。君等は見逃してあげようと言っているのだよ」

「本気か？」

「勿論。まあ――あの娘も生かして、最大の恐怖と絶望を与えて心を壊してから、あの手の店に売り飛ばしてもいいのだがね。クククッ！」

くぐもった笑い声が狭い屋上に響き渡る。

「もし断ったら？」

「君も“血まみれ狼”のケイ君も命はない」
ゼンは目を瞑る。沈黙が世界を覆う。

「答えは出たかね？お狐君」

毒蜂が寂寞を覆す。

「聞くまでもないのだろう？」

ゼンの言葉に呼応して再び虚空からくぐもった笑い声が辺りに反響する。

「まあ、ね。交渉は決裂か」

「元よりこの交渉には意味はなかった。何故なら俺の意思は既に決まっていたからだ。それを覆すことなど、如何なる神でも出来はない」

「噂通りの堅物だね、君は」

刹那、ゼンの元へ三迅の疾風が飛来した。

「――！」

銀色に輝くナイフだった。

咄嗟にゼンはチェロケースを前面に構え、盾にする。

老紳士の放った三本のナイフは、乾いた音を発ててチェロケースに突き刺さった。

「そこか！」

チェロケースを盾にしたまま、ナイフが飛来した自分の背後に瞬時に振り返ると銃を構え直し、上部マウントに備え付けられたスコップを覗き込む。

「ふむ、STIハンター6.0か。なかなかいいものを持っている」
ゼンの背後から声音が上がる。彼が今一度振り向くと、そこには白いスーツ姿の、涙目の道化師のような仮面をつけた男が立っている

た。

男はゼンが振り向くと同時に右手に手にしたナイフを突き出す。

「お前が——！」

それとほぼ同時にゼンは自分の銃を突き出していた。ぶつかり合う鉄と鉄。甲高い金音と火花を散らしそれらは交差する。

「ほう。私の一刺しを防ぐとは。流星は妖狐。その名は伊達ではないか。やはり“見えて”いたのかな？」

「貴様——」

眉を微動させたゼンに、XNはクツクツ、と笑みながら続ける。

「近い未来が見える君の目は些か厄介だ。だが、恐らく映る映像は君の絶命する刹那であろうな」

「——」

無言のゼンを見つつXNは締めくくる。

「そのような妖しの業も、我が殺しの前では至極無意味なものだよ」

「無意味なものかは最後までわからんぞ？ 何故なら、俺はまだ自身の死を見ていないからだ」

そんなゼンを嘲笑するかのよう乾いた笑みが響く。

「笑っていられるのも今の内だ。貴様も妖の手管に魅せられ逝くがいい」

ゼンの手から銃が滑り落ちる。瞬間、彼は今し方まで盾にしていたチェロケースの蓋を開放した。

次の砌、けたたましく響く爆裂音。

「——！」

仮面の男は瞬時にバックステップで身を引き、給水塔の影へと消えた。

彼が消えて空虚となった空間を二発の銃弾が迅雷のように突き抜ける。

「やはり調べた通りだよ。君のチェロケースは武器庫になっているのだね。拳銃、小銃、果てには散弾銃。これはバラエティー豊かなガンラックよ」

チェロケースを地面に立て掛けたゼンの両手には、新たな銃が一本ずつ握られていた。H & a m p ; K ・ U S P 。その銃口からは揺ら揺らと白い硝煙が立ち昇っている。

開け放たれたチェロケースの中には、X N の言葉通り幾挺もの銃がところ狭しと収納されていた。

「腕前もいい。二挺の発射のタイミングは完全に同時。コンマ一秒たりともずれがない。どんなに耳が良い人間でも、二挺の発射音が一つに聞こえてしまう。それにこの雲耀の如き早撃ち。普通の人間ならばこうもいかなはずだよ。才能か、はたまた熟練の賜物か。何とも素晴らしい技術よ、正に妖の化物だ。驚愕の境地だな。いやいや、恐れ入る」

給水塔の裏側から老紳士の声がする。ゼンは両手の拳銃を構えながらゆっくりと給水塔へと歩を進めようとする。

「だが、君は私には勝てんよ」

X N は余裕たっぷりに、勝ち誇ったようにそう言った。刹那、ゼンの背後から突如彼の元に再び疾風が飛来する。

「――！」

それは彼の右肩に深々と突き刺さっていた。先程 X N が投擲したナイフと同じ物だ。

「――馬鹿、な――」

振り向き銃を弾倉が空になるまで連射するが、そこには誰もいない。

「これが貴様の“二重身”か」

弾切れになった二挺の銃を投げ捨て左手で肩に突き刺さったナイフを引き抜いた。傷口から血が飛沫く。

「いかにも。君は死ぬ前にこの技を見抜くことが出来るかな」

引き抜いたナイフを手から離し、ゼンはガンラックから再び二挺、拳銃を引き抜き虚空に構える。

「ククク、どこを見ているのだね」

声のした方へと顔を向ける。給水塔の上だ。X N はその上から、

ほぼ真下にいる彼を見下ろす形で立っていた。

「――！」

XNの姿を認知したゼンは頭上で高笑いをしている彼に向けて発砲する。

「クククッ！」

銃弾が飛来する瞬間、XNはそのままの体勢で給水塔の裏へと飛び降りた。ゼンの放った弾丸は今回もXNの体ではなく、ただ虚空を撃ち貫いただけだ。

「速いな――どういうからくりだ？」

「いくら妖狐でもこのスズメバチの速さには敵わんよ」

ゼンの右側面から三度投擲されるナイフ。瞬時にサイドステップで回避するも顔を掠めてしまう。

頬に一筋の赤い線が走り、そこからツウ、と鮮血が流れ出る。

「さて、そろそろ幕引きとしようかね」

言葉と同時にXNが給水塔の影から飛び出してくる。手には投擲された物と同じ形状のナイフが握られていた。

「――！」

そして同時に背後からナイフが飛んでくる。

「成程。貴様の手の内、理解したぞ」

「――？」

ゼンは即座に背後に振り向き、飛来するナイフを確認すると体を横に反らし回避。だがナイフを手に迫るXNはすぐ後ろだ。

それでも彼は焦ることも、振り返ることもなく、再びチェロケースを手にして思い切り振り回した。

乾坤一擲の強烈な打撃がXNを強襲する。

「ぐわ――！」

ゼンの左脇腹をナイフが掠めるが、スーツを破いただけに止まり致命傷には至らない。

逆にゼンのチェロケースは綺麗にXNの顔に命中した。苦悶の声を上げる彼の顔から仮面が剥がれ落ちる。その仮面が乾いた音を立

てて地面に落下するのと、彼が給水塔の壁まで吹き飛び背中を激突させるのはほぼ同時だった。

「グッ——ゲホッ！——クククッ！」

XNは右手で顔を隠しながら左手でナイフを構え直す。

「この勝負——仕切り直しだ」

そう言うとゼンはベルトのバックルを外して空高く放り投げた。

「——？」

刹那、バックルが爆ぜ、辺りが眩い閃光に包まれる。

「チィッ！ 閃光弾か！」

光の中、XNの耳にゼンの声が木霊する。

「俺には“見えて”いる。たった今“見えた”。次に会う時、それは毒蜂の羽が？げ地に堕ち、妖狐にその体を喰い千切られる“貴様等”の終焉の瞬間だ」

光が薄れ、彼が目を開いた時、そこにはゼンの姿はなかった。

毒蜂（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

共闘戦線

「いらっしゃいませ」

時は早夜、ここは渋谷のボーリング場。

ケンの本屋を後にしたケイは、知り合いに会う為この場を訪れた。
「おやおや。また俺とスコアの張り合いに来たのかい？鼻垂れ坊や」
カウンター席に座る黒いジャージの上にエプロンを垂らし、色眼鏡を掛け短めの金髪を携えた、背の高い中性的な顔つきをした男がそんなことを言う。先程ゼンと会っていた男だ。

「冗談抜かすな、バーカ。俺は結果が見えてることはやんねえ主義なんだ。失禁小僧」

「ふむふむ——要は負けるのが怖いということか。いい様だな。この負け犬野郎」

「馬鹿言ってんじゃねえよ、馬鹿が。この間も俺の圧勝だったじゃねえか。その前もそうだ。その、前の前だってそうじゃねえか」

「はてさて？ 覚えていないなあ」

「都合のいいオツムだぜ。間違えてオムツでも入っているんじゃないかねえのか？ ああ？」

「いやいや、全く。お前の知の無さ加減には毎度毎度驚かされる。そんな程度の低い言葉遊びで俺がびびるとでも思ったかい？ 低脳」
男が高笑いをする。

「んだと？」

「調子に乗りすぎだぜ？ クソ野郎」

睨み合う二人。

そんなケイのコートの裾を、連れの少女が恐る恐る引っ張った。

「ああん？ 今取り込み中だ、後にしな」

「——」

首を横に振る少女。

それを見た男が嘲笑う。

「おいおい？ あのケイ様とあろう者が子守ですかい？ これはこれは面白い光景だ。実に愉快。今日は動物園まで遠足かな、パパ？」

「どいつもこいつも——」

溜息を吐くケイ。

「前々から思ってたんだがよ、俺はてめえが気に食わねえ」

「奇遇だな、俺も全く同じ事を心中温めていたんだ。因果なことに、お前と初めて会った時からずっとな」

へらへらと笑みながら男が応える。

「なら、話は早ええ。ここらで白黒付けとくか？ そう、はっきりとよう？」

「おやおや？ オセロ勝負か？ 勘弁してくれよ、俺は見ての通り勤務中でね、そんな餓鬼の遊びに付き合う程暇していないんだ。悪いが他を当たってくれ。まあ、麻雀なら急遽相手になってもいいが、それにしてもこの人数じゃあ出来ないだろう？ 更に何処を見渡してもジャンパイすら無いようだしな」

「毎度毎度口の減らねえ奴だ。どーでもいいから早く抜きな。ほら、久しぶりにおめえの得物を見せてくれよ」

「低脳でかつ低俗ときたか。抜きなとかお前の得物とか、ここは風俗の店じゃあないんだよ」

「てめえの脳の仕組みの方が低俗じゃねえか。このエロ眼鏡め」

「そんなナマ抜かしているから、お前の寿命は縮む一方なんだよ。導火線の権化め」

「なあに、安心しな。それでも命冥加で通ってんだ」

「ほうほう、心配して損したよ。安心したら急にその冥加加減を見てみたくなったぜ、御畜生」

「御託ばっか安物市場みてえに並べてんじゃねえよ。早く構えねえと決闘が一方的な殺戮に変わるぜ？」

一触即発の二人。

と、その時、少女が二人の間に割って入った。

「だめ」

目頭に涙を堪え、きつ、とした表情で二人を制止する。

「邪魔だ、退け」

「いや」

「早くそこから退け。言うこと聞いて退け！ 餓鬼が！」

「いや」

依然、少女は動かない。彼女の表情には強い意志が秘められていた。

その様子に困惑するケイ。

「ぷっ」

「――？」

「くくくッ！ あっははははッ！ こりゃあ傑作！ あの“血まみれ狼”が、こんな小娘一人相手にここまで狼狽するとは、な！」

男が破顔した。さぞ愉快そうに高笑う。

「んだと？ てめえ――」

「興が削がれたよ。それに――こんな餓鬼の前で殺りあっちゃあ、教育上余りにもよろしくない。今日のところはその小娘に免じて理性を作動させておいてやろうじゃあないか」

「そいつあどうも。こっちも途中のおめえの口上から面倒になってたところだ、大いに助かるさ。だが、またしてもてめえの死に顔が拝めなかったのはちとばかし残念かな」

「減らず口を」

二人を見て安堵する少女。

「で、今度は何用だ？ また俺の車を借りに来たのか？ 残念だが、奴は廃車になった。お前のクソ荒い運転の所為でな。だから、もうここには無い。どうしても必要なら屑鉄置き場から引っ張り出してくるか、友達がいるなら他にあたりな」

「いんや。ここにXNが来なかったか？ ちょい前くらいによ」

ケイは知っている。この場がその手の人間の娯楽と連絡の場所となっている事を。

彼の台詞を聞いて色眼鏡のレンズの内側で細い目を更に目を細める男。

「どうだか。餓鬼やら若造やら爺やら、毎日客が多いものでね。どうしたものか」

「来たんだな？　おい、来たんだな？　何時だ？　何時頃だ？」

「おいおい？　おめでたい奴だな。聞きたかったらそれ相応の態度つてもものがあるんじゃないかな。違うか？」

「調子に乗るなよ？　眼鏡猿。早く言え」

「教えて下さいお願いします。とか言ったら考えてやってもいいんだがぁね」

「てめえ——いい加減にしろよ？」

「いい加減なのはお前だろう。他のギルド連中に無償で秘密を吐く程、俺も甘くはないんだよ」

「やっぱ、ここで死んどくか？」

竿入れのジッパーに手を掛けるケイト、それを色眼鏡の底にてどこか冷めた目で見る男。

「心底気の短い奴だな。早死にするぞ？　今、ここで」

男が低い声で反応したその時。

「おしえてください、おねがいます」

突然の声に驚くケイ。隣を見ると、少女がペコリ、と頭を垂れていた。

「おい、馬鹿！　馬鹿野郎！　何考えてやがる！　こんな奴に頭下げんじゃねえよ！」

「パパを——パパをたすけたいの」

「だからっててめえ、プライドってモンがねえのか、馬鹿野郎！」
その様子を見ていた男が再び大声を上げて笑う。

「あっはっは！　ホント、今日は愉快な一日だ。この光景、お前さんの親御に見せてやりたいくらいに愉快痛快だ。成程、この小娘が例の仏さんの一人娘か。流石、いずれはギャングの跡取りよ。自身の立ち回り方、世渡りの方法をこの年で心得ていると来た」

「おい——今、仏——と？」

ケイが静かな口調で男に尋ねる。

「ああ、そうだ。そうだと。トニオ・ワーニエ氏はな、既に殺されているのだよ。そう、あの化物、毒蜂によってな。どうやら今回はこちらの方が情報を仕入れるのが早かったらしい」

男の無情な言葉を聞いて愕然とする少女。

彼女の双眸から遂に涙が溢れた。

「ば、馬鹿！ 泣くんじゃねえ！ まだ事実と判ったワケじゃねえ！」

「いんや、事実さ。紛れも無い真実さ。何故なら俺は、その遺体をこの目で見たからさ。奇しくも奴の遺体を発見したのはな、ウチの後輩なんだよ」

「——！」

「実の娘の前でこのような非情の宣告をしなければならなかったのは愧ばれるが——まあ、真実ってのは何時までも隠しておけるモノじゃないからな。早めに知った方が、当たり前だが早く対処出来る。そうだろう？ 違うか？」

「パパ——パパ——！」

少女は父の名を連呼し泣き続ける。

「チッ、無駄足だったワケかよ——！ くそっ！」

依然啜泣く少女を横目に毒吐くケイ。

「無駄足？ 違うな、それは。残念な事に、まだ事態は終わっていないのだよ」

「終わっていない、だあ？」

「ああ。奴はその小娘をも仕留めるつもりだ。ワスプのミッシェンはワーニエ一族の完全抹消だそうだ。トニオ氏の遺品の携帯に奴からそんな感じのことが示唆された文面のメールが送られて来ていたから間違いない」

「そうか。成程、な」

ケイが男に背を向けた。

「ほう？ 何処へ行くんだ？ まさかケイ——お前ともあろう男が、人情風にでも吹かれたのかい？」

すると、ケイが首だけ男の方へ向き直る。

「知らねえよ。俺はただ、気に食わねえからブツ殺しに行くだけだ。ここまでその気にさせといてこの仕打ちはあるまりだ。だから仕留める。他の情なんざ、持ちっちゃあいねえよ」

そして数歩歩いたところで再び振り向く。

「こいつを頼むわ。直ぐ戻る」

瞬間、男の顔に笑みが浮かんだ。

「いや、その頼み事は聞けないな」

「ああん？ 何でだ？」

「俺も今から仕事上がりの一服をしに往くところでね。奇遇にも——いや、不運にもお前と同じ場所へ往かにはあならんだ」

彼の言葉にケイは一瞬ニヤリ、と笑った。だが、その仕草は直ぐに普段の鋭い表情に隠れてしまう。

「煙草くらいここで吸ってけ。隣でもくもくやられちゃあ、仕事にならねえ」

「オーケー、いいだろう」

男はポケットから煙草を取り出すと口に銜えた。そして、カウンターから退出しケイに並ぶ。

「野郎の居場所を知りたくて俺のどこに來たようだが——俺はお前なんかには教える気は更々無いからな」

「教えてくんねえでも、くっついてくるてめえの目え見てりゃ見つけれんだろ。にしても、何でてめえもその気になってんだ？ 酒でも入ってんのか？」

「おいおい、今さっきまで勤務中だったのに酒なぞやれるかよ。元より俺は匂いだけで酔う下戸でね。まあ、この際お前に便乗してみようか、ってところかな。俺一人じゃ、とてもじゃないが奴の相手は務まらんからな。でも、あのような大物を見す見す見逃す程、俺も間抜けじゃあない。いい機会だ。チャンス到來ってヤツだ」

「また俺を利用して儲けようって魂胆か。まったく、ふざけた色眼鏡だ。全く以ってふざけた野郎だ——不愉快だぜ」

「それはお互い様ってとこだろう？ そんなことより——生憎油を切らしていてな、悪いが、火を点けてくれ」

「相変わらず準備の悪い奴だ。これだからいつもいつも段取りが最悪なんだよ」

「何を言うか、花見の席取りは結構得意なんだぜ。お前も知ってるだろうが」

知るか、と嘲笑しながらケイは、コートのポケットから百円ライターを取り出すと、男の銜える煙草に着火する。

「これはこれは、どうも」

「貸しにしとく。よおく覚えときな」

「器が小さい奴よ」

「何とでも言え。——くれぐれも言っておくぞ。俺の邪魔だけはすんじゃねえぞ？」

「互いに、な」

「奴の首取った時の分け前はおめえと俺んところで分割だ。綺麗に分割するぞ？ 一円たりとも不釣合いは起こさせねえ」

「もし、起きたらどうするんだ？」

「ん時はこいつにくれてやれ」

後ろを振り返るケイ。彼の背中には少女の手が伸びていて、彼のコートの裾を引っ張っていた。

「いいぜ、上等だ。お前の依頼、受けてやる。一緒に往こうぜ。往って野郎ぶっ倒してやろうぜ」

ケイは少女に柄にも無く落ち着いた声で言い聞かせる。
その言葉に頷く少女。

「いやいや、子煩悩なこと」

「うるせえ。往くぜ、コウ。久しぶりの共闘戦線だ」

「へいへい」

「一先ずゼンの奴に連絡入れるか。アイツ、今何してんだ？」

「さあて、ね。ま、近いうちに出くわすだろうよ。俺には見えて
る」

「なんだあ？ あいつじゃあるめえし」

ケイとコウ、そして少女は次なる目的地へと向かう。

それは、毒蜂の巣窟であった。

共闘戦線（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

デッド・オア・アライヴ

「で、首尾は如何ですかね、XN殿？」

暗室に男の低い声が響く。

ここは表参道の外れにある酒場。

薄暗い店内には店員はおろか客はこの数人の男達の他にはおらず、言うならば彼等の完全貸切状態である。

「子細無い事だよ。既に居場所は突き止めている。後は追い詰め殺す。それだけよ」

テーブルに座りながらカラカラと氷を揺らしつつグラスの酒を飲む仮面の老紳士に、正面席に座る黒いスーツ姿の色黒で痩せた男が歓喜の声を上げた。

「流石はスズメバチ、冷酷かつ無情なる生粋の殺戮者よ」

「ククク、そんなに買い被られても困りますなあ、ミスター・アノツキオ」

「ふふ、もう直我等の悲願が成就する訳ですな、貴方のお陰で。ボスもさぞかしお喜びになられるでしょう」

「それこそ我が本懐。感激の極みよ」

「取り敢えず、今宵は飲みましょう。祝勝会の前夜祭ですな」

「クク、君という奴は、本当に祝い事が好きだねえ」

同時に口にアルコールを含む二人の男達。その様子を、周囲に立つ取り巻きの男が祝福の笑みを浮かべながら眺めている。

「にしても、ミスター・XN？　あまり悠長にやられては、小娘の奴もこの国から出てしまうのでは？」

「なあに、それは杞憂さね。彼女は逃げぬさ、決してね。君にも解るだろう？　あのワーニエ氏の血をお引きなさる御方よ、やられっぱなしで黙っている程、お人よしでは無かろうて」

すると、老紳士の前席の男・アノツキオの顔に禍々しい笑みが走る。

「成程、一矢報いに現れる、と。ですが、相手はまだ子供ですぞ？
何の力も持たぬ餓鬼が、そのような勇猛果敢で大人びた真似を
しますかね？」

「その為に彼女はこの国の用心棒兼殺し屋を雇っているのだよ。待
っていれば、彼奴等が自ずと現れ、きつと私にこう言うだろう。銃
口を向けながら高らかにこう叫ぶだろう。この野郎！ 覚悟しろ！
と」

「はあ——」

「されば、いつもと同じさ。いつもと同じく返り討ちさ。ちつとも
寸分も変わらん、いつも通りの変哲も無い筋書きよ」

そう言いながらXNは一気に酒を飲む。

「至極容易なミッションさね」

その時、彼の言葉を遮るように出入り口のドアが開放された。
バンッ、という荒々しい音と共に蹴り空けられた木戸は、衝撃の
余韻を残して振動している。

「ほうら、ね。噂をすれば」

咄嗟に音源の方を向くアノツキオと配下の男達。

そこには二人の男が立っていた。一人は黒、相方は深紅のロング
コートを纏っており、彼等の手には日本刀と拳銃がそれぞれ握られ
ていた。

「よう！ 楽しんでるか？ クソ野郎共！」

黒いコートの銀髪の男が刀を肩に当てとんとん、と微動させなが
らそんな軽口を叩く。

「貴様ッ！」

配下の男の一人がナイフを抜き、間髪入れずに店内を駆け二人の
異邦人との距離を一気に詰める。

「遅い。遅すぎる。愚鈍、まるで鈍亀だ」

深紅のコートを着た金髪の色眼鏡を掛けた男が動く。否、動いた
と言っても、銃を携えた腕のみである。

砌、紅い男の銃が吼える。モーゼル・M712の二挺拳銃、それ

が彼の得物だ。

「ガハッ！」

腹部を二発の弾丸で射抜かれ卒倒するアノッキオの配下。その様子を唾然とした表情で見ていた他の配下達も、一斉に思い思いの得物を抜いた。

「おうい、コウ？ 残りの敵さんは何人だ？」

やがて白銀に煌く刃を構えつつ、銀髪の男が相方に尋ねる。

「待っている、今数える。まず一人――」
穿つ。

「二人」

弾丸が標的を撃ち穿つ。

「三人、四人」

次々と獲物へと迫る死神の権化。

「五、六――」

それらは確実に彼等を死の淵へと誘う。

「七！」

七回の銃声と七度のマズルフラッシュ、そして七つの悲鳴。

今にも二人に襲い掛かろうとしていた七人の男は例外無く皆、紅い男・コウのモーゼルから吐き出された葉莖と共に木製タイルの床に転がった。

「全部で七。悪いが過去形だ」

コウが色眼鏡越しに目を細めながら、二挺のモーゼルを依然座ったままの老紳士に向ける。

「やあやあ、祝いの酒は美味かったかい？ お爺様？」

唾然とするアノッキオを他所に、XNの口元が綻む。

「ああ、まったく以って美味だった。どうだい？ 君も一杯やらんかね？」

グラスを持ったまま、そんな冗談じみた言葉を吐く。

「悪いが、俺は途方も無く下戸でね。引き続きその、前席の野郎とよろしくやってくれ」

「そうかい、それは残念だ。では、ミスター・アノッキー――」

彼の言葉が終わらないうちに、斬撃が奔る。

鋭利な光が彼等の間を疾駆した。

コウが色眼鏡越しに目を細めると、黒スーツ姿の男の首が転がり落ちる。

「おい、そんなにうめえ酒なら俺にも飲ませろや」

XNの眼前で崩れ落ちるアノッキオ。それを見てXNは仮面の内で破顔する。

「ククク！ 行儀の悪い坊やだねえ。飲みたいならホラ、遠くに立っていないで近くに來なさいな」

「馬鹿か、てめえ。誰がてめえとなんぞ飲むって言った？ 俺あ、一人酒が好きなんだよ」

「やれやれ――至極我侘な坊主だ。君等のお陰でせっかくの宴の席が台無しではないか。この始末、どうしてくれるのだね？」

「あの世で続きをやればいいじゃねえか。幕に間に合うように、今おめえも超特急で送ってやるよ」

「愉快愉快。そうか、君が“血まみれ狼”のケイ君か。逢えて光栄だよ」

「お前がワスプか、クソジジイ？」

ケイの台詞にXNはより一層破顔した。

「ああ、そうだとも。おや？ 君の相方が話と違うね？ 妖狐――ゼン君は何処かね？」

「さあて、ね。野郎は知らねえ。だが、てめえを殺るくらいなら俺とこの眼鏡猿だけで十分事足りるだろうが」

「嘗められたものだね、いやはや」

そんな余裕たっぷりのXNの言葉に銃声が応える。

彼の、老紳士の仮面を、弾丸が掠める。

その一撃で、仮面に亀裂が疾駆し、やがて粉々に砕け散り、砕けた仮面の下からは、やはり老練された皺だらけの男の顔が現れた。

「御託はいい、死ぬ覚悟をしろ。そろそろお迎えの時間だよ、御老

体」

コウが硝煙を上げるモーゼルの照準をXNに合わせながら、一步彼に近付く。

「私？ 否、死神のお迎えは君のだろう。そうだろう？ 若造君」

刹那、ヒュッ、という風切り音がした。

「――！」

コウの顔に苦悶の表情が走る。彼の右肩には、店の電球光を浴びて鋭く光を放つ、銀色のナイフが刺さっていた。

「ち、チィー！ ま、まさかこれが――」

「ドッペルゲンガーか！」

二人の反応を吟味しつつ、XNはテーブルにグラスを置く。

「私の顔を見られては、君等は生かして帰す訳にはいかんかな。さて、私が旅立つのはもう少しばかりあとになると思うから、先に逝って特等席を確保しつつ待っていておくれ」

言い終わらぬ内に、XNが座ったままテーブルを蹴り上げる。

派手な音を立てて飛来する木製テーブルは、刺さったナイフを引き抜いていたコウの腹部に容赦無く命中した。

「が、がはッ！」

その場に蹲るコウ。顔だけXNの元へ向けるが、今まで彼が居た場所は無人大であった。

「何ッ！」

「おい、コウッ！ 馬鹿かてめえは！ 何遊んでやがる！」

「五月蠅いぞ、ケイ！ まずいぞ――奴を見失った！」

「くそったれ！」

刃を構えつつ辺りを見渡し索敵するケイ。だが、XNの姿はどこにも無い。

「逃げたのか？」

未だ体を走る激痛を抑え立ち上がりながら、コウがケイに問い掛ける。

「いんや、まだ近くにいますはずだ――！」

「そうだよ、ケイ君。私はまだ——君の傍にいる。そう、すぐ傍にね」

刹那、再びナイフが飛来した。

それはさく、という軽い音を立ててケイの足元に突き刺さる。

「ちッ、野郎め、どこから——」

二人は咄嗟に散開し各々障害物の影へと隠れ身を潜める。

そんな中、柱の影に隠れたケイのコートのポケットから電子音が漏れた。

「まったく、誰だ、こんな時によう！」

取り出しディスプレイを確認すると、ケンからのコールだった。

「何だあ！ こっちは忙しいんだ！」

柱越しに周囲を見渡しつつ、ケイは携帯電話を耳元に寄せた。

『分かったんだ、ドッペルゲンガーのからくりが』

「マジかよ！ 早く教えろ！」

『さっきゼンから聞いたんだ。それによるとXNは——』

ケンの言葉が不自然に途切れる。

舌打ちするケイの手の内の端末には銀色のナイフが突き刺さっていた。

「死合い中にお友達と談話とは、君も余裕だねえ、ケイ君。で、何か分かったかな？」

声のした方へと振り向くケイとコウ。そこには、店の中央にはXNが勝ち誇ったように立っていた。彼の腕の中には先程外で待つように言い聞かせ待機させておいた少女の姿が。

「ほうら見つけたよ、捕まえたよ、お嬢ちゃん」

気分が悪くなるような甘ったるい声を発しながら、拘束する少女にナイフを突きつけるXN。

「しまった！」

「野郎——この野郎ッ！」

たじろぐ二人。

「さて、宴は今正にクライマックスを迎えた。これから私は、君等

の前でこの小娘の子花のような小首を切り落とすでしょう」

余裕綽々な高笑いを上げる老紳士は、笑いながら二人を嘗め回すように見つめる。

「これが格の違い、年季の違いさ。さて、二人のナイトさん、この小娘が天に召されるまでの間、命乞いをする時間を与えよう。君等各々の神様に今までの愚行を懺悔するがいい。いやいや、あり過ぎて間に合わんかな？ クククッ！」

「くッ！ くそお——！」

「おい、どうするんだ！ ケイ！」

「知るか！ てめえは黙ってろ！」

XNのナイフを携える右手が振り上げられた。

「さようなら。さようなら、小さな姫君。君の勇気は忘れない。さようなら」

そして、無情にもその切っ先が振り下ろされんとしたその時。

「——ッ！」

XNの動きが止まった。同時に、彼が手にしていたナイフが乾いた音を立てて床上に転がる。

引きつった口から苦悶の声が漏れ、痛みに耐えられず少女を手放す。

少女は、駆け足でXNから離れると出入り口の方へと向かう。

彼の振り上げていた腕には、先程まで彼が握っていたのと同形状のナイフが突き立っていた。

「やってくれるねえ、ゼン君——！」

開けっ放しだった出入り口に、長い黒髪の男・ゼンが立っていた。今では、少女が彼のスーツにすっかりしがみ付いている。

「それはお前の持ち物だっただろう、だから返してやったままだ。ついでに、さっきの借りも返させて貰うぞ」

ゼンがチェロケースを開放する。

中には幾挺もの拳銃と二挺の小型自動小銃、そしてバレルとストックを短く切り落とした散弾銃が一挺収納されていた。

彼はそんな武器庫から一挺の拳銃を取り出し構えた。

「この――たった一撃加えたくらいでいい気にならぬ方がいいぞ？」

「それはどうかな、スズメバチ。言っただろう？ お前の手の内は理解した、と。故に勝機は俺達にある」

「な、に――？」

「ケイ、今だ。後ろだ。直ぐ後ろを斬れ」

「――！」

その言葉で反射的に背後に振り向き、斬撃を繰り出すケイ。

「が、ガハッ！」

すると、そこから悲鳴が漏れる。

「「な、何だ？」」

驚くケイとコウ。

そこには、目の前の男と全く同じ姿だが別の、仮面の男が蹲っていた。

「これがドッペルゲンガーの正体だ。こいつはな、二人組み――そう、番の殺し屋なのだ。片方が過剰に気配と殺気を発し、もう片方が極端に両者を削る。さすれば皆、大きい気の方へ注意を向けるだろう？ その隙にもう一人が接近し、不意打ちにより仕留める。常に二人で立ち回り、入れ替わり立ち替わりの時間差攻撃で相手を晦まし翻弄する――そんな人の心理と“XNは一人”だという思い込みを巧みに利用した暗殺法。何だ、蓋を開ければ古典的かつ単純で捻りの無い手法よ。それがXNのトリックだ」

「き、貴様――！」

「羽根が？ げ、宙を舞えぬ毒蜂など、最早気に留める必要は無い。早々に逝け」

ゼンは、蹲っているもう一人のXNの頭を撃ち抜いた。

「ヘグ！ お、おのれえ――！」

「おい」

怒りと痛みに激昂するXNに、コウが語り掛ける。

「――？」

額に汗を浮かべた彼が振り向いた瞬間、コウのモーゼルが鋭くマズルフラッシュを虚空に刻む。

「が、がああああ――ッ！」

彼の放った弾丸は、まっすぐに宙を駆けXNの右足を撃ち穿つ。

「俺も返しておくぜ、さっきの借りをよ。マジで痛かったんだぜ？」

「き、き、きさ、貴様等ッ！ や、やめ、やめ――」

「何だあ？ 今更命乞いかよ、豪く態度が違うじゃねえか、お爺様？ だが駄目だね。おめえは俺を怒らせた。生かしちゃお国に帰さねえ」

ケイが冷笑しながら呟くように、倒れる老紳士に言い聞かせた。

「覚悟しな、糞爺」

ケイはポケットからライターを取り出すと、XNのいる方へと放り投げる。

すると、瞬く間に炎が木造の建物に引火して辺りが赤色に染まった。

「iiiiiii！」

起き上がろうとするXNだったが、足に力が入らない。力を込める度、彼の体軀に激痛が奔った。

「ひ、ひiiiiiiiッ！」

痛みの信号が疾駆する体を引きずり、匍匐しながらその場から這い出た老紳士だったが、辺りを炎がすっかり包囲しており、文字通り逃げ場は無い。

無様な醜態を曝す彼の元へ、燃え盛る炎を背に銃を構えゆっくりと迫るケイとゼン。

「俺にはここに来る前に見えていた。この時、この瞬間が。俺達の勝利が。お前の敗北が」

ゼンが静かな口調で謳う。

それに頷いたケイの腕が、刀が、XNの脂汗で満たされた皺まみ

れの首筋に伸びる。

「あばよ。あばよ、ニセモノジョンブル。てめえの泣き面は忘れない。あばよ」

そう唾棄しつつ至近距離から刃を一閃、返り血を浴びるケイ。

さもそれが当然かの如く、身も内も微動たりしない。

見下ろす眼差しが死体と化した肉塊を撃ち穿つ。

まるで獲物に食らいつき返り血を浴びた狼ようだ。

それこそ――

その姿こそ、彼が血まみれ狼である由縁。

こうして、歴戦の暗殺者XNはこの極東の地にて潰えたのだった。

デッド・オア・アライヴ（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

エピローグ

「次のニュースです。昨晚、渋谷区の飲食店で火災が発生しました。建物は全焼しましたが、死傷者は確認されていないとのことです。老朽したガスボンベが何らかの刺激を受けて破裂したのが出火の原因と見られ、引き続き捜査官がその原因を――」

壁に掛けられたテレビから流れるニュースに、短髪の女は溜息を漏らす。

「もう。派手にやってくれちゃって。情報操作をするこっちの身にもなって欲しいものね」

目黒の喫茶店のちいさなテーブルを、三人の大人が囲む。

「何言ってるんだ、ルイ。それが無くなったらおめえ等の仕事が無くなっちゃうだろ」

「ケイちゃん。少しは申し訳なさそうな顔出来ないの？」

「睨めっこ遊びでもそんな顔は出来ねえな」

向かい合う二人のそんな会話。

踏ん反り返って軽口を叩くケイと、再び溜息を吐くルイ。

「にしても、貴方ともあろう人がまさか他のギルドの人と協力するなんてねえ」

「ああ？ そうだったっけ？」

「貴方とあの人は随分と古い仲なんだって？」

「まあ、な。餓鬼ン時からの腐れ縁だね。迷惑な話だぜ、全く」

ケイはやれやれ、のジェスチャーであどけてみせる。

「それはまあ、いい。ルイ、あの娘は？」

茶を啜りながら尋ねるゼンの言葉にルイが笑顔で答える。

隣には今日は少女ではなく黒革のチェロケースの姿があった。

「今頃空港よ。迎えに来た彼女の組織の幹部と一緒にね。九時にはこの国を発つわ」

「そうか」

ゼンは一瞬、壁時計に眼をやると静かに頷く。

現時刻は七時二十分だ。

「それで、報酬の話なんだけど」

「ああ、そうそう。あんな甘ったたりい飴玉一つじゃやってられねえからな」

ケイに頷きながらルイは続ける。

「彼女の後見人の方からお金が下りて、ね」

「マジか！ 幾らだ？」

「がば、とだらしがなかった姿勢を正すケイ。

「こちらの価値に換算して七千万」

「ひゅう！」

喜ぶケイだったが、それを見つつルイが続ける。

「なんだけど、貴方、約束したんですってね。報酬は六亀商会の方と分割するって」

「あー、そんな事も言ったような——」

ゼンが曇った眼鏡の底からケイを睨む。

「それで、さっきこちらに請求が来て。貴方のお言葉通り半分持つていかれたわ」

「チッ、ちゃっかりしてらあ。だけどよ、まだ半分——」

言葉を遮断しルイは続ける。

「それと、損壊した建物の弁償代と、情報操作に駆使した金額を差し引いて——」

「へ？ おいおいおい！ 何だあ、それは？」

「当たり前でしょう！ 人の家壊してそれを無かった事にしたんだから！ そんなのタダでなんか出来ないんですからね！ 責任はとって貰います！」

「どれだけ掛かった？」

ゼンが静かに尋ねる。

「総弁償費に三千八百万、マスコミの抑制に六百万」

「待て。そうなる——」

「そうね、マイナスね」

「うえええーッ！」

大声を上げるケイト、無言のままのゼン。

「はい。これがその承諾書。サインしてね」

ルイが笑顔で紙切れを二人に差し出す。
すると。

たった今、窓の外を一瞥したゼンが席を立った。

チェロケースを掴み担ぎ、そのまま進歩する。

「そうだ。少し野暮用があつてな、失礼する。後は頼むぞ、ケイ」

「おいおい！ 待て待て！ どこ行くだよ！ おい！」

ドアの前まで進んだゼンが、ケイを冷たい目で見つめながら言う。

「煩い、よ」

「うっ——！」

「自分の尻拭いくらい自分でしろ。いい大人だろう」

そして、彼は外へと消えた。

「ちよっ？ ちよっと待てよ！ 置いてかないでゼンちゃん！」

慌てて立ち上がったケイは駆け足でその場から逃げようとする。

「うがッ？」

だが、突然伸びたルイの足に躓き、その場に倒れてしまう。

「うふふ。逃がさないわよお？ ちゃあんとサインして貰いますか

らね」

ルイは承諾書を片手に、横たわるケイを真上から見下ろす。

「そ、そりゃねえよおおーッ！」

早朝の喫茶店に、狼の狼狽のようなケイの悲鳴が木霊した。

店の外へ出たゼンの前に一台の高級車が止まった。
すると、後部座席から昨日の少女が現れた。

「何故、ここへ？」

「おいをいいたかったから」

彼女の言葉に、ゼンの口元が緩んだ。

「気にするな。俺達は只、いつものように仕事をしたただけだよ」

そう言いながらチェロケースを置き、屈んで少女の目線に合わせ頭を撫でる。

「これ」

くすぐつたような表情をした少女がポケットから何かを取り出した。

キャンディーだった。

「わたし、こどもだからこんなものしかもってないの」

「いや、十分だ。その気持ちさえあれば、もう十分だよ。何億何兆の額にも匹敵する立派な報酬だ」

優しい笑みを浮かべつつ、ゼンはキャンディーを受け取る。

「さあ、もう行った方がいい。飛行機の時間に合わなくなるぞ」
「うん」

最後に少女は笑顔を作り、ゼンに背を向ける。

「ばいばい、おにいさん。やんきーなおにいさんにもよろしくつたえて。また、あそびにくるから」

そして、道路脇に止められていた高そうな車の中に消えた。

「変な日本語を知っている。今度会ったら正しい日本語を教えてやらないと、な」

走り出す車を横目に流しつつ、ゼンはチェロケースを担ぎ上げ歩き出す。

そのまま、早朝の路地を進んでいった。

終わり。

エピローグ（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9216s/>

Full Force

2011年5月15日12時25分発行